

イスラエルにおける神の救済史：特に、モーセについて

106 編は 105 編と共に、主なる神による救済史を歌っている。106 編も「ハレルヤ賛歌」の一つである。「ハレルヤ」で始まり「ハレルヤ」で終わっている。私たちの人生も、教会も、このように「ハレルヤ」(Yahweh を讃美せよ) で始まり、「ハレルヤ」で終わりたいものである。

この詩も 48 節もあり長いので大まかな読みと黙想としよう。まず、出来たら朗読をしてみよう。特に、救済史の中で、モーセの執り成しの祈り (23 節) を中心に黙想しよう。この詩編もまた、神と救済史に「心を留めること」、逆に、これらに「心に留めず」「忘れたこと」が歌われる。彼らの忘恩にもかかわらず、つまり、頑なな民にもかかわらず、主なる神自身が忍耐され、悔い改め、「思い直す」(45 節) ことが歌われる。ありがたいことである。

ハレルヤで始まってハレルヤで終わる詩編は詩編 105 編と同じくハレルヤに次いで主なる神への「感謝」が来て、救済史の回想が続く。

1. 恵み深い主に感謝せよ、慈しみはとこしえに (1-2 節)

主に感謝せよ、なぜなら、主は「恵み深いから」彼の「慈しみ」(契約への忠実) はとこしえであるから。ここにヘブライ信仰の基本である、神の「良い」と「慈しみ」が登場している。これらが感謝と賛美 (2 節) の根拠である。

「主の力強い御業を言葉に表し/主への賛美をことごとく告げ得る者があろうか」(主なる神の名を呼び、感謝をささげよ (1~6 節) 「良さ」と「慈しみ」とは「力強い諸々のみ業」によって裏打ちされている。このような主の力強いみ業をだれが言葉にし、賛美をだれが示すことができようか！ 発音する、示す、の両方とも強調形で「全く、完全に」できるかと詠嘆のような感じで問いかけている。答えはむろん、誰もできないということである。

「おお、Yahweh に向かって感謝をささげて」彼の名を呼べ。」と続く。礼拝も信仰もまず神の呼び掛けがあり、神への呼び掛けがあって可能となる。同じような姿勢の呼び掛けが以下に続く中で、「心に留めること」(zikrū) が基本的なこととして勧められる。「主の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡を/主の口から出る裁きを」(5 節) 心に留めよと言う。

2. いかに幸いなことか (3 節) 公平な審きを守り、義を行う人々

3 節にはお馴染みの「いかに幸いなことか」が登場するが、その対象はヘブライ信仰の第三の鍵語である「公平な審き」を守る人たちであり、また、第四の鍵語である「義」を絶えず行う人たちである。「御救いによってわたしに報いてください。」「報いる」は直訳では「訪問して下さい」であり、「あなたの救い (ヤーチャー) で訪問して下さい」である。こうして、五番目の鍵語が「救い」(広がりを与えること) であろう。

3. 主なる神とその業を記憶すること、主は信仰者を心に留めてくださること

そして、以下に、六番目の鍵語の「心に留める」(zākərēnî) の主題が導入される。「主よ、わたしに

心を留めてください。」「忘れないでください」と言う願いである。以下関連語を上げておく。

7 節 民は主なる神の豊かな慈しみに「心を留めず」

13 節 彼の御業を忘れ去り

21 節 彼らは自分たちを救ってくださる神を忘れた

22 節 み業を成し遂げられた方を忘れた

45 節 彼らに対する契約を思い起こし

そして、彼らの忘恩、反抗にもかかわらず、主なる神は「豊かな慈しみにしたがって思いなおした」
直訳：彼の契約への忠実の豊かさによって悔い改めた。

4. 「モーセは…破れを担って御前に立ち、彼らを滅ぼそうとする主の怒りをなだめた。」(23 節)

度重なる民の忘恩・反抗とそれにもかかわらず忍耐をもって主なる神がイスラエルを赦し、愛されたことが述べられる文脈の中で、神に選ばれたモーセの執り成しが語られる。モーセはまさにこの「執り成し手」として「選ばれた」。選びとはまさにこの時のためであった。これがイスラエルの「指導者」の役割であった。「破れ」「破れ口」とは城壁の一番弱い場所であり、そこが破れると敵が一斉になだれ込んでくる場所である。

2014 年 12 月 14 日の説教より：

「いったい、「破れ」あるいは「破れ口」(ペレツ)とは何でしょうか。同じ表現がエゼキエル 13・5 に出てまいります。「お前たちは、主の日の戦いに耐えるために、城壁の破れ口に上ろうとせず、イスラエルの家を守る石垣を築こうとしない。「破れ口」とは、前後の文脈から考えると、敵に囲まれ、籠城している城壁のある個所のことで、敵によって破られ、敵の突破口となってしまった場所、味方にとって一番弱い、危機的な場所を意味しているようです。いったんそこが破られたら敵が一気に攻め寄せてくるのです。その危機のときに、自分の生活に忙しく、あれこれの日常の生活に精一杯で「破れ口」に上らず、土嚢をつまみ、石垣を築かないとはいったいどうしたことでしょうか。エゼキエル 22・30 にも同じ表現が用いられ、このように言われています。「この地を滅ぼすことがないように、わたしは、わが前に石垣を築き、石垣の破れ口に立つ者を彼らの中から探し求めたが、見いだすことができなかつた」。ここには神の義と愛の葛藤、人間の罪を審く神の義と、なんとかして人間を救いたい神の愛の葛藤、そして、預言者を通して、悲鳴にも似た神の叫びが記録されています。破れ口とは、イスラエルの民が主なる神の恵みと救いにもかかわらず、少々の困難に出会うとすぐにつぶやいてしまう、そんなイスラエルの弱さ、愚かさ、不信仰がさらけ出された場所であると考えられます。」

神の怒りを破壊することから覆すために(追い払うために)、神を回心させるために！ という信仰は何と大胆な信仰か！

5. 再び、感謝と賛美

この詩は最後に再び 感謝と賛美に言及し、ハレルヤで結ばれている。